

「歎異抄の世界と現代」 (2)

—第1章 弥陀の誓願—

松田 正典



2011年9月20日、T S S文化大学で講演する筆者

【原文】

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏もうさんとおもいたつところのおこるときすなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまうなり。(第1段)

弥陀の本願には、老少・善悪の人をえられず、ただ信心を要とすと知るべし。(第2段)

その故は、罪悪深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。(第3段)

しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず念仏にまさるべき善なき故に、悪をもおそるべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき故にと、云々。」(第4段)

第1段『弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏もうさんとおもいたつところのおこるときすなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまうなり。』

【語彙】○弥陀……阿弥陀仏。梵語amita。mitaは量る、aはその否定。amitaは無量の義。仏は梵語buddhaの音訳。自覚と覚他の覚行が成就した存在。○誓願……『大無量寿経』の四十八の誓願、一々の願に「若不生者、不取正覚」の誓いの言があるので誓願と呼ばれる。第十八願は「至心信樂の願」とも「念仏往生の願」ともよばれ、この願を特に弥陀の本願、弥陀の誓願とよぶ。○不思議……五種の不思議。(1)衆生多少不思議・衆多の生命の不思議。(2)業力不思議・生命の働きの不思議。(3)龍力不思議・大自然のいとなみの不思議。(4)禅定力不思議・人間の精神のはたらきの不思議。(5)仏法力不思議・仏法の働きの不思議。○摂取不捨の利益……一切の衆生を救う法蔵菩薩のはたらき。

1. 大いなる願い

浄土三部経の一つ『大無量寿経』（以下『大経』）は伽話の形式で顕されている。一人の国王が、世自在王如来という名の仏の御許において説法を聞いて無上の正真道意をおこし、国をすて王位をすて一人の沙門となり法蔵と名のつた。そして「速やかに正覚を成じ、もろもろの生死の苦の本を抜かん」との願をおこし、「五劫を具足して莊嚴仏国清浄の行を思惟し摂取」し四十八の誓願を立て、成道して無量寿仏（阿弥陀仏）と名のつた。劫とは梵語のカルパの音訳の「劫波」の略語。きわめて永い時を表す。

法蔵菩薩の四十八の誓願は三つの願群から成り立つ。（児玉暁洋氏紀要論文による）

- (1) 人間生成の願群（第一願から第十一願）
- (2) 仏道成就の願群（第十一願から第二十二願）
- (3) 菩薩道展開の願群（第二十二願から第四十八願）

ここで、分水嶺となる願の名を挙げておこう。第一願「無三悪趣の願」。地獄、餓鬼、畜生を三悪趣という。建立した国土に三悪趣の無いことを誓う願である。三悪趣については後に解説する。第十一願「必至滅度の願」。衆生が生老病死の苦海を虚しく流転することなく必ず煩惱滅却の涅槃に至る（真の人間形成）を誓う願である。第二十二願「一生補処の願」。世界に一つでも生死の苦海を流転するいのちがあるならば、建立した国土の主となることやめて苦海に留まり済度に働くことを誓う願。これを古来、普賢菩薩の大徳という。第四十八願「聞名得忍不退転の願」。阿弥陀仏の名を聞いて深甚の世界を認識し、不退転に生きる菩薩行を誓う願である。

2. 大いなるはたらき

「念仏申す」とは南無阿弥陀仏と口称することであるが、なぜ「念仏申さんとおもいたつ心のおこるとき」に「摂取不捨の利益」が成就するのか。人は五欲煩惱に迷惑し愛別離苦に懊悩し、生死の苦海を虚しく流転する存在。『大経』は、浄土の功德によって生死の苦海そのものを功德の宝海となそうという法蔵菩薩の誓願を説く。

法蔵菩薩の仏道成就の願群の中、阿弥陀仏の「名」に法蔵菩薩の兆才永劫の願行の功德を集約し、「名」を聞く者の全てを救うと第十八願に誓われた。これを本願という。『歎異抄』第1章の「弥陀の誓願」とはこの本願をさす。

大乘仏教の祖・龍樹大士は、「阿弥陀仏の誓願」を生死の苦海に浮かぶ「弘誓の船」と讃えられる。弘誓とは、大いなる願いとそのはたらきを意味する。親鸞聖人は、次のように詠われる。

「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ のせて必ずわたしける」 （『高僧和讃』一龍樹章一）

晩年の親鸞聖人のことば 「五劫思惟の願をよくよく案ずれば親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を身にありけるをたすけんと思しめし発ちける本願のかたじけなさよ。」 『歎異抄』後序

3. 救済と自覚

釈迦は、人の上に「常楽我浄」は無いとご覧になる。そして、常楽我浄無きに常楽我浄有ると思うを「四顛倒」、四つの顛倒（てんどう）の妄想と教えられた。「常」とは永遠性、「楽」とはユートピア、「我」とは揺るぎない自己、「浄」とは汚れのない世界。人は、常楽我浄を求めてやまない。

真の救済は、必ず自覚を伴う。自覚とは、大いなる智慧に照らされた自己へのめざめであり（全否定）、あるがままの自己を自己として肯く身となること（全肯定）である。それは、大いなる智慧（仏智）への目覚めであり、翻って現実への確かな目覚めである。

4. 往生をとぐる（救済の道理）

(1) 『岩波仏教辞典』の「往生」の解説

①この世の命が終わって他の世界に生まれることをいうが、浄土思想の発展によって、この穢土を離れてかの浄土に往き生まれることをいうようになった。

②往生思想は、生天思想にその源流をみることが出来る。しかし、両者の間には決定的な違いがある。生天は輪廻の世界を超えるものでない。往生浄土は輪廻を脱して仏の世界に到るという意味を持つ。

③浄土真宗では、真実報土に往生する化生と方便化土に往生する胎生を説く。またこの世で往生が定まることを即得往生、浄土に生まれることを難思議往生という。

(2) 生天思想のもつ迷妄性

生きているときに善行を積んでその善因によって天界に生まれることを説く生天思想は、洋の東西を問わず素朴に求められ続けている民間信仰である。それは靈魂の輪廻思想に根ざしており、釈尊以前のバラモン教の中に既にあった。（靈魂の六道輪廻）その迷妄性は、現実卑下と現実からの逃走にある。

釈尊は、靈魂の輪廻思想を「いのちの尊厳」を損なう迷妄とし、縁起の法としての「業の六道輪廻」を説きになった。人間の行為（業）が地獄（際限のない苦の世界）—餓鬼（際限のない餓えの世界）—畜生（際限のない囚われの世界）—修羅（際限のない闘争の世界）—人間—天上と、経巡る。人間性（間柄的存在、求道的存在）を回復し、業の輪廻を横に超出して仏に等しい正覚を開く道であるが故に、『大経』に説かれる仏道（浄土教）は「横超の直道」といわれる。

浄土教は、生天思想（魔界外道）ではないが、長い歴史においては生天思想に転落した事実もあった。この世の辛苦があので報われるという思想は、個としての尊厳の自覚を伴わず、民衆を眠らせる封建統治に荷担したとの批判もある。

第2段『弥陀の本願には、老少・善悪の人をえられず、ただ信心を要とすと知るべし。』

1. 真の人間形成としての成仏道“Self-Identity”

『大経』に説かれる法蔵菩薩は、生死の苦海を流転する衆生の救済のために四十八の願を立て、浄土を建立し、一切の衆生の往生浄土の願成就の暁に阿弥陀仏となりたもうた。それ故、先の「仏道成就の願群」は「国土成就の願群」ともいう。仏（浄土の主体）の成就によって国土（浄土）が成就する。この国土の功德によって穢土（生死の苦海）の主体（衆生）が化身土（浄土に生まれる道行き）の主体となるところに「真の人間形成（成仏道）」がある。自灯明（Self-Identity）は法灯明（Dharma-Identity）によって成就するのである。

2. 救済の根本—弥陀の本願（大悲の願）

仏道成就の願群の中、「迷い深い身に目覚めて、わが名を呼べ。わが名を口称する者は悉く必ず往生浄土において不退転となす」（善導大師と法然聖人の釈）と誓われる第十八願を「阿弥陀仏の本願」（弥陀の本願）とされたのであった。

三木清の言葉を借りれば「絶対なるものの自己限定」なのである。ここに救済の根本がある。

第3段『その故は、罪悪深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします』

バラモンの説く地獄と餓鬼は死後の世界であったが、仏説においては、いずれもわれら情有るものの現前の事実である。中村元著『古典を読む往生要集』（岩波書店）によると「地獄の哲学的意義は、シナの天台大師によって特に深められた。地獄はわれわれを離れたところにあるのではなくて、われわれ自身のすがた」なのである。

法蔵菩薩は、生死の苦海を流転する衆生を、本願酬報の国土である浄土に往生せしめ、その国土の功德に依って煩惱具足の身でありながら、大涅槃を証す身となす（ここに救済の本質がある）ことを誓われた。この法蔵のはたらきを、天親菩薩は、仏土の功德、仏の功德、菩薩の功德の三種の功德莊嚴をもって讃嘆なさった。親鸞聖人は、これを次のように讃げられる。

「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」（『高僧和讃』一天親菩薩一）

第4段『しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらざる念仏にまさるべき善なき故に、悪をもおそるべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき故にと、云々。』

1. 善・悪とは何か

善悪とは社会規範であり、社会的に規定されたルールを守るのが善、ルール違反が悪と考える。私どもは、社会規範のお陰で、今日の安全な生活が提供されている事実も忘れてはならない。しかし、深い精神文化が伝承されているところに社会規範が保たれる本当の基盤がある。深い精神文化の伝承が失われる時、国家全体が荒廃に向かうこと必定である。精神の深さは、善悪をどう見るかにある。

ブツダ釈尊は、善悪を社会規範とはご覧にならない。悪とは地獄、餓鬼、畜生の三悪趣の世界とご覧になる。すなわち、いのちの尊嚴を損なう行為、もしくは尊嚴が損なわれた世界を悪という。したがって、善とは、三悪道を出ずる行為、人間性を回復する行為、人間性を保持する行為、人間の子を人間と成す行為である。

2. 深い悲しみと大いなる喜び

三悪道を出ずる行為としての善行を「修善（しゅぜん）」という。

『観無量寿経』（以下、『観経』）には、修善として心の行一定善（じょうぜん）十三観と、身の行一散善（さんぜん）三観とが説かれる。定善・散善の修行を旨として仏道を歩む機類を定散（じょうさん）の諸機という。（善導『観経四帖疏』：真宗聖教全書編纂所編『真宗聖教全書』第1巻に収録）

増谷文雄師は「対他的に人間関係の問題」として「人はなにをなすべきか、なにをしてはならぬか」という問いに答えるのが倫理学の課題であり、「対自的に自己の人間形成の問題」として「業」を問うのが仏教独自のアプローチだとし、「仏教の業を説くことは、はなはだ広く深く、かつ精細であって、その業説はまさに仏教独特のものであるというに相応しい。思うにそれはブツダ・ゴータマの正覚によってなれる縁起・無常・無我ないし因果などの思想的基盤があって、は

じめて、かくも広く、深く、かつ精細な業思想の展開を可能ならしめたものと考えられる」といつておられる。業は身・口・意の三業として説かれる。増谷師は、釈尊は「意業」に最も重きをおかれることを注意され、釈尊の説かれる人間形成は①父母所成、②飲食所成、③意識所成であるとし、意識所成とは「意識が人間を形成する」ことであり、ここに「人間のみの持つ自由意志の参加」があるとなさる。（増谷文雄『業と宿業』講談社）

人の子が人間となる行為が善であるということは、人間には自己の存在を賭しての善への深い執着があるといわねばならない。それが「悪を恐れる」心の根底にある。

いのちの尊厳の成就を志求する心、菩提を求める心であった善の定善・散善を大事に思う心そのものが自らのいのちの尊厳を損なうという事実。親鸞はこれを「定散心」と名づけて、萬行・諸善の仮門（第十九願）と善本・徳本の真門（第二十願）として教示し、この門を開き如来選択の願海（第十八願）に転入せしむことこそ釈尊の隠密の意であることを明らかにした。

喩えれば、定善・散善は卵のいのちにとっての殻。殻は卵のいのちを守ってきたものであるとともに、ひよことなることの障りであり、障りが障りと自覚させることが親鳥のはたらき。定善は親の心に触れる縁、散善は親のはたらきに遇う縁となる。

『観経』に伝えられる「五逆」の人・アジャセも「謗法」の人・ダイバダッタも元はといえば「定散心」なのである。海に浮かぶ一個の青石、これを「十悪」という。石を除こうとして見ると、水面下にもっと大きな青石が拵がっている。これを「五逆・謗法」という。さらに「定散心」という大石になって地球の芯まで繋がっていたと。この深い悲しみに目覚める者にのみ、大いなる喜びが知られてくる。

「悪をも恐るべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき故に」とは、自らの定散心に傷つく者にかけて大慈悲仏心である。『観経』には「仏心とは大慈悲これなり」とある。

3. 善導の教えと才市の歌

■ 善導大師の「二種の深信」（善導『観経四帖疏』、親鸞『教行証文類』信巻引用）

「一には決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して、出離の縁あることなしと信ず。」 —（古来「機の深信」と呼ばれる。）

「二には決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受したまうこと疑なく慮りなく、かの願力に乗じて定めて往生を得と信ず。」 —（古来「法の深信」と呼ばれる。）

■ 才市（1850—1932）の歌

「慚愧・歡喜は法の宝で

世界国土がみな慚愧

世界国土がみな歡喜

慚愧、歡喜のなむあみだぶつ」（藤秀環『宗教詩人才市』、鈴木大拙『妙好人』共に法蔵館）

ここに、西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」（『西田幾多郎全集』第9巻）と「場所的論理と宗教的世界観」（同 第11巻）のルーツがある。

（本稿は、平成23年9月20日にTSS文化大学で行った講演の概要である。）